夏目漱石

私は軽快な心をもって陰欝な倫敦を眺めたのです。

佐野金之助

1.

夏目漱石は独特の現実家であり、かつ独特の観念家であった。漱石に哲学的な問題を潔癖に求めようとする人もあるが、しかしそう見れば見るほど、出来上った像は現実の漱石を離れて、純粋さのもつある種の固苦しさをぬぐいえず、評者の意図に反してやはり肉体が希薄となりがちである。かつて滝沢克巳氏が詳細に描いた漱石像もそうであった。

他方、たとえば小宮豊隆氏の描く漱石が精巧な剝製と言われるように、いかに敬慕の念をこめてなぞってみても、所詮、そこには家庭で怒ったりわめいたり、しょんぼりしたり喜んだりする一人の男の、もっともな生活の姿以上のものは本質的には出てこない。著者の世帯じみたリアリズムの索莫とした味けなさをおぼえるのである。現実家漱石を把えることも、観念家漱石を把える以上に困難である。

そのことは、漱石の作品の奇妙な魅力乃至は不満に通じる。漱石に形而上的な観念を期待する読み手は、この日本の文豪の現実的な低さを感じて物足りない。一方、現実味のある文学の面白さと倫理的な教訓性に、文壇小説に求められぬ大味な楽しさを喜ぶ読者だってある。そういう読者に支えられて漱石は漱石であったのであり、人気ある文豪として生き、つづけてきたのである。

漱石は独特な現実家であり、その独特の意味あいにおいて同時に特異な観念家であった。私はそれをはっきりととらえなおすことで、私の漱石像を描いてみたいのである。本当にその作品は偉大であるのか、今日の私たちを魅了する力を、掛値なしにもっているのかどうか。そういう平易な疑問と平俗な興味から私は出発する。そして彼が日記・書簡・作品のすべてを通して、その生涯の折々に語りかけてくることばの中で、とくに私の心にひびいてくるいくつかの言辞に焦点を定めて、それに導かれ、それをつきつめることで、この独特な日本的現実家であり、類型のみられぬ人間存在の探求家であった一人の近代作家を浮び上らせたい。本章はその一つである。

2.

漱石の英国留学は一風変っている。外遊の期待は勿論、普通考えられるような国を離れる不安や喜びの感情もほとんど見られないように思う。出発から帰国まで、一貫して、それはそうなのである。持病の胃痛に悩まされ、経済上の理由からきりつめた生活に苦しめられた事情を考慮に

入れてみても、留学中の日記に流れている基調は、どうにもならないほど暗いのである。高橋義孝氏のいうように日記から読みとるべきものは「体質とか体臭とか、或は性癖とかいうような生物学的意味における個人の身体的生命のありやう、たゝずまい、即ちその人間の持ってゐる自然的なもの、普遍的客観的なものではなしに一回的特殊的な身体的なるもの」（「森鴎外」―日記的なるものの本質）であるとすれば、渡英中の日記は、たしかに漱石の思想思考を越えて、彼の独特の、生の身ぶりを伝えてくる。それは「暗い」というより致し方のない直接の漱石の相である。そこに、言われるように鬱病そのものを見るほどにそれは暗いのである。しかしながら、彼の病気をここに持ち出すというのならば、むしろ日記に読みとるべきは、鬱病の暗さではなくて、鬱病に対して、あるいは鬱病の中で生理的に保とうとし、また保たれている微妙な心のバランスの重苦しさでなければならぬ。

往来ヲ歩クト何レモ小悪ラシイ顔許リダ愛嬌ノアル顔ヲシテ居ルモノハ一人モ居ラヌ其代リ小供デ鼻ヲ垂ラシテ居ル者ハ一人モナイ（明治三四・二・一八）

これは一体、触目の事実を叙したものか、感情的な批評なのかと考えはじめるのは愚かであろう。虚心に読めば、漱石の不安定な心がそこから如実にひびいて来る。さらには、そう書きつけることに、心の不安定を平衡に導こうとする生理的な自然な作用を、われわれは読まざるを得ないのである。それが孤独者の日記の意義でもあるとするなら、次のような記録に、ものほしげに漱石の文明批評や民族意識を拾い集めようとする態度の皮相さも注意されてよいはずである。

大風　夜下宿ノ三階ニテツク〴〵日本ノ前途ヲ考フ」日本ハ真面目ナラザルベカラズ日本人ノ眼ハヨリ大ナラザルベカラズ（同・一・二七）

この日記もまた暗い。無論、日本の前途を憂うる暗さを言っているのではない。事大主義を通りぬけた底の漱石個人の暗さである。たしかに漱石の滞英日記には彼の体質的なと言えるほどの暗さがにじんでいる。それは一体、どこから来て、何を物語っているのであろうか。

「今夜シャツ及び白シャツ襟ヲ着換ユル用意ヲナス」（同・二・二五）「此日シャツ襟ヲ替ユ」（三・一〇）「白シャツ下シャツ股引ヲ替ユ」（三・一二）「襟白シャツヲ易フ」（三・一七）「明朝白シャツ襟履足袋ヲ易ル準備ヲナス」（三・二三）「白シャツ襟ヲ易フ」（三・三〇）「白シャツト襟ヲ易ユ」（四・七）――この偏執を思わせるような記事、それを書きつけざるを得ない心とは何なのであろうか。単なる備忘癖や、文飾ではあるまいし、清潔好きの一人の男を見てみてもなにほどのこともあるまい。われわれは、そこに微妙に保たれている孤独な心のバランスとその暗さを読まざるを得ないとして、では、その暗さとは如何なる病症を語っているのであろうか。

実は私が、英国留学中の漱石を見直してみようと誘われたのは、後年（大正三年）学習院で行った有名な講演『私の個人主義』の中の一句―私は軽快な心をもって陰鬱な倫敦を眺めた――という言葉の、重さと軽さに興味と疑問を感じたからである。そこにはいろいろの問題が含まれている。実際の日記には「軽快な心云々」のはずむ身振りは見られない。かといって、自力による文学論の樹立を決意した当時の漱石の心の軽快さにいつわりがあったとも思われない。学習院の学生に対する激励や忠告の意味、聴衆を前にしての心のはずみを考慮に入れてみてもやはり、この一句の明るさには、ロンドンの客舎で文学論を夢みた当時のそれが移入されていることは否めないと思われる。

後に紹介することになるが、この時、漱石自身が喜びのあまり見過し

た自己内部の矛盾、したがって英文学に欺かれた問題を未解決のまま無意識にもち越した矛盾について、最も鋭く、かつ明解にときほぐしたのは、私の見る限りでは、ただ千谷七郎氏の『漱石の病跡』のみである。

3.

漱石の留学体験は、赤裸無援の「個」において英国に相対したものであった。森鴎外のドィツや、永井荷風、高村光太郎のフランスと、彼の英国という対象の違いを軽視するわけではないが、それ以上に本質的な相違として、それらの国に対するに鴎外は「家」を、荷風や光太郎は「父」（反「父」の形で）を後楯として持っていたことに注目しなければならない。そういう肉身をぬきにして英国に飛び込んだ漱石に、彼の留学体験の特異さの焦点があると言って過言ではない。この場合「肉身」とは「日本」そのものを象徴する。

近代日本の初期に、留学体験をもった人々の、異国に対する愛着や異和感は、われわれの想像をはるかに越えた強いものであったと思われるが、その愛着（乃至異和）は、肉身への異和（乃至愛着）と表裏していた。つまり異国への限りない愛着は、裏に日本への背離を秘めて均衡を保つことで自我の安定を保証していたと言ってよいのである。ヨーロッパにひかれる態度と、肉身・家系・伝統を脱け出そうとする態度は、彼らの内部に生まれた「近代」――傷つくことをその属性とするほどの後進日本の、「自我」の内的葛藤の相（すがた）を外に投写したものであると言える。そのことで近代の自我は内訌分裂をかろうじて免れえた。外部に転換された愛着と異和の等量のバランスが彼らの精神の安定を保証し、日本への背離が彼らの自我を救ったと言ってよかろう。

ところで漱石の場合、それらと逆の形で愛憎のバランスがとられていたとは考えられないのである。彼の苦悩は、英国嫌悪が日本愛着と表裏してはいなかったところにその深刻さがあった。

普通考えられているようには、漱石は陰欝な倫敦にあって日本を慕ってはいない。彼は英国を捨てて帰るべき故国を持ってはいなかったのであり、それが彼の神経衰弱の内相であることを一般に見過ごしてきたのではないか。彼が赤裸無援に英国に相対したと述べた実相はここにあるのである。

われわれは、英国における漱石が身体的にも決して健康ではなかったことを知っているし、経済的にも極度にきりつめた生活を送っていたことを知っている。その悪条件が神経衰弱をこうじさせたことを知っている。それはその通りであろう。が、かりに漱石が裕福な留学生活を送ったとして、われわれは放蕩する漱石をそこに想像することが出来るであろうか。その放蕩が彼の心の暗さを晴らしたと考えることが出来るであろうか。おそらく一層自己のみじめさと孤立を感じこそすれ、その逆であるはずはないのである。単に漱石が周知のように倫理的な人間だということを越えて、そうなのである。

高村光太郎のフランス体験については吉本隆明氏の秀れた論稿がある。鴎外と異なる光太郎の放蕩に、父（日本）への排反を見ると同時に、西欧近代に対する共通感（愛着）と、それをつきこえてさらに骨をさすような孤絶感（西欧に対する劣等感）とをとらえている。

おそらく、鴎外をも含めて留学生の異国でのデカダンスに、近代日本の自我の複雑な屈折を見るのは至当でもあり興味をよぶ課題でもある。それぞれの意味合いの深浅は別として、われわれはそこに西欧近代に対

する愛着と劣等感の複合感情を予想しうるからである。

パリの女と一夜を共にした翌朝、洗面をしようとしてふと上を見ると、見慣れぬ男が寝衣のまま立っている。よく見るとそれは鏡の中の「僕」であった。――「ああ、僕はやっぱり日本人だ。　Japonais だ。mongol だ。Le jaune だ。(光太郎『カフェより』の主人公の述懐)

右の一節に見られる自我の中核にくい入る苦い劣等感には、吉本氏の言うように、職人である父・高村光雲に代表される日本への排反と、芸術家ロダンに象徴されるヨーロッパへの共感、さらに、自己移入の対象であるヨーロッパからはじき返されている孤絶感の複合した苦渋がにじみ出ている。

それにくらべて次に掲げる漱石の日記には、精神の奥底で演じられる観念の劇的な自己破壊の激しさは表面に出ていないように見える。

此煤烟中ニ住ム人間ガ何故美クシキヤ解シ難シ思フニ全ク気候ノ為ナラン太陽ノ光薄キ為ナラン、往来ニテ向フカラ背ノ低キ妙ナキタナキ奴ガ来タト思ヘバ我姿ノ鏡ニウツリシナリ、我々ノ黄ナルハ当地ニ来テ始メテ成程ト合点スルナリ(三四・一・五)

光太郎の『珈琲店より』に近代日本における芸術家の精神誕生の陣痛を見るのに対して、漱石の日記に現実家の現実的な感想以上のものを求めるのは難かしい。にもかかわらず、ここには「英文学に欺かれた」という漱石が、芸術家以前の自己存在の空虚を噛みしめて感傷など微塵もない現実の中で身動き出来ずにたたずんでいる姿がすけて見える。それは、西欧に対する日本の劣性として一般化することのできない彼個人の存在の問題である。

光太郎の西欧への身を噛むような孤絶感の裏には、西欧への夢と共感が存在した。そこに近代日本の芸術家の、芸術と非芸術、近代と伝統、西欧と日本との、避けることのできない対決が如何に苦しい戦いであるにしろ、具体的な道程として彼らの未来を約束していたのである。

漱石にはそれが無い。彼に西欧への誘惑があったとして、それは後述するように「スキフト」論に示されたような特異な共感であった。見逃せないのは、ここで漱石には英国に対する夢も隔絶の劣等感もなければ、同時に、日本の優越も劣等意識も、普通の意味では、無かったという点である。異郷の生活をうちきって引き上げる故国の家も無かったというのが、その孤立の真相であったのだ。

漱石が文部省から英国留学を命ぜられて横浜を出帆したのは明治三三年九月、三四才の秋であった。英文学という新しい学問にたずさわる夢を手ばなしに持ちえなかったのは勿論、それにたずさわる意義さえ見出せないままに滞英二年、三六年の一月に東京に帰ってくる。

その年九月に永井荷風がアメリカに渡っている。荷風もまた風変りな遊学と言うべきで、その体験の実相は光太郎のそれと全く対蹠的で面白いばかりでなく、漱石の場合と比較して参考になる。

荷風は、実業界に進ませようとする父の意に抗して芸文の道にはしった。滞米四年の後ついにあこがれのフランスに渡った。フランスは彼にとってはボードレールの憂愁の国であり、人の世の哀感を盛った幻の国であった。当時の心情は『モーパッサンの石像を拝す』一編に尽くされており、その文章の底に流れている情は、あこがれのフランスに寄せるセクシャルといえるほどの青春の陶酔と訴えである。

彼はアメリカにあってもフランス語を学ぶほどであった。フランス人の家に下宿して彼らの俗語を聞くのを無上の喜びとしていたのである。

そもそも私が始めてフランス語を学ぼうと云ふ心掛を起しましたの

は、あゝモーパサン先生よ、先生の文章を英語によらず、原文のまゝによみ味ひたいと思ったからであります。一字一句、先生が手づからお書きになった文字を、わが舌みづからで発音して見たいと思ったからであります。

見逃せないのは、荷風の恋情の対象が現実のフランスではないこと、モーパッサンの描いたフランスであり、ボードレールの歌ったパリであることだ。フランスの土俗に心ひかれ、古き伝統に魅せられたのである。

河下の方を見返すと、古びた石の人家の立続く河岸通り、……十三世紀の初めに磯を置いたサンヂャンの古刹と、其のまはりに中世紀の名残なる傾きかかった小家の屋根。見渡す全景の古色暗然たるに比較して、直ぐ其の真上なる山の頂きにはフールビエールの新しい大伽藍が懐古派ならざる吾々の目にも近世的建築の卑しい事を知らせてゐる。（『ふらんす物語』・蛇つかひ）

ここで荷風の胸中に対立していたのが、古い日本と新しいヨーロッパではなかったことに注意しよう。荷風の場合には光太郎と逆に、「父」に代表されるものは日本の古い伝統ではなくて、逆に近代日本のがさつな空しさであった。彼が心ひかれたものは、新しい西欧ではなく逆に、憂愁と甘美に彩られたフランスの芸術であり、その古き充実した伝統の一貫性にあった。この事情は荷風独特である。

私は先生のやうに発狂して自殺を企るまで苦悶した芸術的生涯を送りたいと思ってゐます。私は先生の著作を読み行く中に怪しきまでに思想の一致を見出します。私共が今日感じつつある処を、先生は二十年前に早く経験して居られたのです。

彼は、人生に単調と虚偽の幻影を見たモーパッサンに限りない慕情を綴っている。

中村光夫氏は、荷風が他の洋行者のようにフランスに近代文明のはなやかさを見ずにすんだのは、彼が日本の眼をもってでなくアメリカの眼をもって見たからだと言っている（『永井荷風』）。おそらく『ふらんす物語』に流れている感情は、華やかなアメリカ文明にも心引かれなかった荷風の、憂愁なフランスに対してそそいだ愛慕の念であろう。

しかし、私にとって一層重要に思われるのは、荷風の胸中のフランスがアメリカ文明と対比される現実の二十世紀のそれではなくて、芸術の中に描かれてきた、そして荷風がそこに夢を托したアンチームなふらんすだったことである。芸術といってもよいし伝統といい直してもよい。彼がアメリカの眼を通してフランスを見た以上に、事実は、この内なる「ふらんす」を通してすべてを濾過したところに彼の内的経験の特異さがあったのである。軽薄な父、空転する新しい日本が、こうして、古きよきふらんすにおしきられる。

いずれにしろ、高太郎にあっても荷風にあっても、その個性的なあり方は別として、日本と西欧との戦いと平衡が内在しており、それが後進日本の遊学のもつ宿命であったことは容易に想像されるのである。

しかし、漱石の英国が彼に嫌厭の情を催させたとして、それは漱石に、対立桔抗するイメージとして鮮明な日本の像が心の中に描かれていたことを必ずしも示しているわけではなかった。むしろ、対立者として彼の心に安定をもたらすべき「日本」が明確な輪郭をえがかない空虚さが、彼の心をさいなんだと私は想定する。

渡英直前と思われる「断片」に漱石は「新を好むの心は旧を恋ふの心なり現在に満足せざるは人情也」と書く。「新を好むの心は旧を恋ふの心なり」という前半の文句に、世間の動向に対する知的な批判を見たり、あるいは彼自身の新にひかれる頭と古い自然を慕う心の自省を読みとる

のも一見識であろう。しかし私をたちどまらせるのは前半の文句ではなく「現在に満足せざる」漱石の心の重さとその奥にぽっかりあけられている空洞の深さである。「不変既に楽しからず変亦楽しからず気むづかしさは人間也」と続けざるを得ない漱石の居場所のない姿である。

阿呆鳥熱き国へぞ参りける

渡英の途上で、そう詠んだ漱石の苦(にが)いひようきんな面影の中に、夢も喜びもなく船上の人となった彼の姿がまざまざと浮ぶ。日本にとどまる「不変」既に楽しからず、身を動かす「変」亦楽しからず、とすれば彼を駆って英国に赴かせたものが、埋めることの出来ない空虚であったと想定するのは誤りではなかろう。「巴理ノ繁華ト堕落ハ驚クベキモノナリ」と書きつけてみても、その裏側に健全な日本が在るわけではない。着英後の日記には抒情的なうるおいが失われ急にこういう批評的な記録がふえている。しかしそれらに文明批評家としての正統な日本の知性を読みとる性急さについては、すでに指摘しておいた。このことは同僚たるべき洋行者に対しても一貫している。

妄リニ洋行生ノ話ヲ信ズベカラズ彼等ハ己ノ聞キタル事見タル事ヲ universal case トシテ人ニ話ス豈計ラン其多クハ皆 particular case ナリ、又多キ中ニハ法螺ヲ吹キテ厭ニ西洋通ガル連中多シ、彼等ハ洋服ノ嗜好流行モ分ラヌ癖ニ己レノ服ガ他ノ服ヨリ高キ故時好ニ投ジテ品質最モ良好ナリト思ヘリ洋服屋ニダマサレタリトハ嘗テ思ハズ斯ノ如キ者ヲ着テ得々トシテ他ノ日本人ヲ冷笑シツヽアリ愚ナル事夥シ（三四・一・五）

にが虫を噛みつぶしたような漱石の顔と、劣等感と優越感の入り混った彼の心が手にとるように見える。この、内向する倫敦の霧よりも暗い心にくらべたら、外化された文明批評的言辞などは、彼にとってどれほどの重みをもっていたか私には疑われてくるのである。「西洋人ト見テ妄リニ信仰スベカラズ又妄リニ恐ルベカラズ」（三四・一・一二）に毅然とした理知の力を見るのみでなく、自己の殻に閉じこもる閉鎖性、自己をよろう防衛的な心の能き方を読みとるのも大切である。何を防衛するのか、心情をである。どういう心情をか、自己の空しさを見つめようとする自省の心と、同時にその結果のもたらす破滅から逃れようとする機制として作く心をである。漱石は理知の人であり、感情の人である。そしてその理知は感情の一変形であったように私には思われる。このことは作品論でのべることになるが、たとえば『草枕』においてさえ、モチーフとしての情感に反して文脈のリズムは理知的な息苦しさを示している。創作に要求される冷静な客観性というようなものではなくて、それ以前にはたらく漱石固有の身構え、心情発露の形式としての理知のせいである。

また、漱石は潔癖な道徳家であり、作品の魅力も倫理性にあると認められる。彼のカンシャクは有名なものだが、それすらもその正義感に帰せられるほどだ。しかし弟子たちにうつった師と、家族にとっての暴君という問題は、漱石の生前死後を通じて、もう一度見直してみる誘惑をそそる。

私の推定では、倫理は感情の一形式であり、対人的、攻撃的にはたらく時の漱石の理知の一相にほかならない。

『行人』執筆期の漱石の荒んだ心は「世界」（昭和三〇・八）に発表されて人々を驚かせた。師の暴君ぶりを伏せようとした気持はこの「伏せられていた日記」を読めば解らぬこともないが、やはり漱石の倫理的人間という先入観にわざわいされた態度と言えよう。漱石自身は、あの日記を書かざるを得ぬほど鬱病が嵩じていたというより（『行人』の整

合性から考えても、それを日記に書くこと自体を病気のせいにするのは単純すぎる。）、書き残すことに感情と理知乃至は倫理の矛盾を感じてはいなかっただろうと思う。漱石固有の事情は、知性も倫理的意志も、落ちつくべき椅子をもたぬ心情の形式であったということである。

4.

千谷七郎氏の『漱石の病跡』（昭三八）は、鬱病という前提に立って『行人』を分析した卓説で、精神医学の立場からする精密な労作であった。漱石論にとって無視できない領域の大きな成果であるが、その中で私は、留学前後の漱石の心の、不安と昂揚の推移について教えられるところが大きかった。それは医学的というより、漱石の心の現実的な問題であり、今まで大ざっぱに看過されてきた、英文学と『文学論』述作についての、漱石の気持の明確な論定である。

氏は漱石の不安に、頭の不安と心臓の不安 ― 精神（理知的意志）的不安と生命的心情的不安の対比を措定してはじめる。しばらく氏の説をふまえて話を進めたい。

余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短かきに関らず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。ひそかに思ふに英文学も亦かくの如きものなるべし、斯くの如きものならば生涯を挙げて之を学ぶも、あながちに悔ゆることなかるべしと。……　卒業せる余の脳裏には何となく英文学に欺かれたる如き不安の念あり。（『文学論』序）

これは後年、大正三年の講演『私の個人主義』中の次の引用に対応している。

私は大学で英文学といふ専門をやりました……試験にはウォーヅウォースは何年に生れて何年に死んだとか、シェクスピヤのフォリオは幾通りあるとか、……英文学はしばらく措いて第一文学とは何ういふものだか、是では到底解る筈がありません……　兎に角三年勉強して、遂に文学は解らずじまいだったのです。私の煩悶は第一此所に根ざしてゐたと申し上げても差支ないでせう。

ところが彼はロンドンの客舎で科学者池田菊苗に邂逅刺戟されて「自己本位」の立場をつかんだ。

此時私は始めて文学とは何んなものであるか、その概念を根本的に自力で作り上げるより外に、私を救ふ途はないのだと悟ったのです。今迄は全く他人本位で、根のない萍のやうに、其所いらをでたらめに漂よってゐたから、駄目であったといふ事に漸く気が付いたのです。……　私は此自己本位といふ言葉を手に握ってから大変強くなりました。彼等何者ぞやと気概が出ました。今迄茫然と自失してゐた私に、此所に立って、この道から斯う行かなければならないと指図をして呉れたものは実に此自我本位の四字なのです。……

其時私の不安は全く消えました。私は軽快な心をもって陰鬱な倫敦を眺めたのです。……

千谷氏の鋭い追跡が始まるのはここからである。氏は次のように説く。

――この気概がやがて「余が身辺の状況にして変化せざる限りは、余の神経衰弱と狂気とは命のあらん程永続すべし云々」の鬱勃たる不満を世間に向って吐き出させた『文学論』序となったものであろう。併しながら、この激しい怒りにも似た鬱憤爆発の辞が、果して「其時私の不安は全く消えました」という人の言であろうか。真に文字通り不安が全く消えた人であるなら、もっと従容たる言辞となって然るべきでは

なかろうか。「其時私の不安は全く消えました」という言葉に却って不安を覚えさせられる。――と。

この疑問から出発して氏は『文学論』序に見られる不安の中味が、二転三転とすりかえられてゆく筋道をたどる。

1　英文学に欺かれて、文学とは何ぞやという認識上の不安・煩悶。

2　次に「自分の本領」に移りたいが「何をして好いか少しも見当が付かない」という人生不安、自分の意志が依って立つべき立脚地の見つからぬ不安。

3　最後に「其時私の不安は全く消えました」という不安は「自己本位といふ言葉を自分の手に握ってから」消えた不安。

ところで、3の時点で、1の認識上の不安は消えていないはずである。それにも係らず、2の意志上の不安が3によって消えたことで、その認識上の不安は何処かに行ってしまっている。ここに頭だけの不安、精神的不安（この用語は千谷氏特有の用法）の正体が意志不安であったことが窺われる。

つまり、意志あるいは精神の不安は、何か他者に対して「特色ある自己」（自己本位）のような立脚地を見つけることが出来れば消えるもので、文学に対する認識上の不安の解消を必要としないのである。

千谷氏の問題は、ここでそれと同時に、底流にある鬱病期の生命的不安は漱石に気づかれず過ごされた、という点に重点を置いて進む。そしてこの見過ごしたために長い間苦しんだ不安（性情と病態）の、漱石自身による自己解剖が『行人』一巻である。そこで、彼は、自己本位や芸術気質を主張する前に人間として出来ていなければ片輪者に終ることに気がつく。『硝子戸の中』以後、漱石からは厭世的な言葉が全く影を消して、晩年の道への視界が開かれることになる、というのが本書の大筋である。

漱石が鬱病にかかり、理知作用が過度になるほど自分を、意志＝精神の側に押しつめてみて、そこに頭と心の不和対立という人間の根本不安を明るみに出すことが出来た。『行人』はその転回点をなす、と千谷氏は言うのであるが、その正否は別として私の教えられたのは、前述したように渡英前後の「不安」の現実性のある解釈である。留学の後半から三年間が第二回目の鬱病期であり、『行人』執筆期がその第三回目に当っていたことは無視出来ないとして、私は、そういう条件をひっさげて置かれていた漱石の心の空虚の具体的な姿に引かれるのである。それは、鬱病による理知や意志への過度な傾斜というだけでは割り切れないもの、理知や意志という形をとって具体的な姿をあらわにする漱石の空虚の問題である。それをつきとめなければ、正状時の初期作品や『草枕』から『二百十日』『野分』への激しい動揺なども十分な鑑賞と説明のつかない問題である。

5

私は、漱石の暗さの特性を、文明論的に言えば、西欧に拮抗させるべき日本を持たぬところに見た。その知性と倫理の発動が空虚な心の形式であるとのべた。日記や断片にしばしば出てくる「日本」とか「日本人」はそういう種類の観念であり、universal case が深い体験を通した実感に生きている語というよりも、平均的観念の意味しかもたぬような感じを受けるのである。千谷氏による、「英文学に欺かれた」から「軽快な心をもって陰鬱な倫敦を眺めた」に至る変化の解明を参照してみて、私には一層漱石の暗い空洞が、そしてその特異性が思われるので

ある。「英文学に欺かれた」とは、漢文学にやはり心引かれたというような表層的なものではなく、自己存在の理由を摑めないもどかしさと息苦しさを感情的に吐き出したものである。それはたとえ漢文学を志したとしても早晩おとずれる空白感であった。

たとえば今日われわれは「疎外感」ということをむやみに口にするが、疎外がわれわれの置かれた一つの条件であるとしても、本当にそれを見つめているのであろうか。「連帯意識」が口にされる。しかしそれが馴れ合いの安っぽい合言葉でしかないかもしれぬと疑ってみる人がどれほどあるであろうか。疎外とは他からおしつけられる条件とは限らない。連帯とは対自的な問題をぬきにしてありえようはずもない。疎外を出発点として連帯意識という結果に結びつけてみても、両者の中間に中身がまるで無い。中身のない焦躁こそ、いつの時代にあっても無力感の実体ではないのか。今日のわれわれが見せかけの統一の中で己の無力感に目をふさいで健康を装っているとしたら、漱石の異常さは、中身の空洞をまずうずめてかからねば身動き出来なかったところにある。そういう意味での空白感を充たすのに、彼の学んだような英文学が応じてくれるはずもなかった。と同時に、「自己本位」の文学論を書く決意に軽快な心を感じた当時の漱石には、まだ自己の決意の本当の異常さはわかってはいなかった。本来漱石のような人間の問題は、哲学的・存在論的性格をおびざるをえないのである。

彼は子規との交遊から、早く俳句に創作の喜びを味っていたが、俳句によって満たされたものと満されぬものがあった。「小生の写実に拙なるは入門の日の浅きによるは無論なれど天性の然らしむる所も可有之と存候」（一二八・一一・一四　子規宛書簡）。　句作によって満たされぬものはこの「天性」にかかわる。漱石がここで意識した天性の意味を拡張すれば、それは、漢文学によっても、さらに文学論の述作によっても満たされぬものであったというべきであろう。十年計画の壮大な文学論は講義におわれて十分な思索を許されなかったと言われる。しかし大学での講義というワクが無かったら『文学論』は生れない。実際に見られる『文学論』から推して、その心理学・社会学的発想そのものが深部で彼自身を破壊しているからだ。自己存在の中身を形成する道を彼自身誤っていた。講義を嫌がり、『文学論』を学理的閉文学と自ら語るにいたった事情は、その出来、不出来の問題をはるかに越えていたのである。

そういう漱石にとって『猫』や『坊つちゃん』がどれほどの意味をもったか、もたなかったかも想像に難くない。これらの作品の攻撃対象は、「スキフト」論の言葉をかりれば、文明的「悪習（ヴイス）」であって人間的「罪悪（クライム）」ではない。自分だけは文明の悪習の外に立たんとして、しかもその外に立つことの不可能を知悉した時、漱石によって文明的悪習は文明的罪悪にまで進み、そこに深い厭世を介して人間存在の謎が口を開ける。中期の我執の問題が彼をとらえ、悪習という相対世界から罪悪という絶対世界への下降を導いたものこそ、哲学的人間としての漱石の「天性」によるものであった。

私は次章で、漱石が自己に生きようとして自己の存在理由の求めて苦斗した道程を作品論として描いてみたいと思う。『こゝろ』で主人公が語る「明治の精神」という一句、「自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだ」という言葉にこもっている漱石の独特な実感の意味を求めて、それは展開することとなろう。この言葉は一人の明治的文人の歴史的現実性と、現実を越える存在論的関心の交点――肉体と理念の交点に浮びでた実感である。東洋における近代の発現、近代における明治的人間の実現の問題としてそれが解明された時、われわれは漱石晩年の固有の課題に正当に入ってゆくことができるのである。